

地元がどんどん広がっていく

名塚 ちひろ (なづか ちひろ) さん 一般社団法人ドット道東理事/クスろ副代表

1986年釧路市生まれ。公立はこだて未来大学大学院修士課程修了。2011年富士通株式会社入社。デザイナーとして社会インフラシステムのデザインや新規ビジネスのプロモーションに携わる。2014年市民団体「クスろ」を設立。2016年Uターン。2019年一般社団法人ドット道東を設立。

北海道に移住（U・I・Jターン）して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域力創造アドバイザー（総務省）のかとうけいこさん。41回目となる今回は、釧路市に生まれ育ち、函館で学び東京で仕事をした後Uターン。まちを「再編集」し続けている名塚ちひろさんにお話を伺いました。

皆と違うまちに住むことが進路選択の一つだったとか

高校3年の8月、現地にも行った父から大学案内をもらいました。公立はこだて未来大学、「デザインが学べるなら」と進学を決めたんです。大学での学びも最高でしたが、まちも良かったんです。釧路とはかな

り文化面が違っていました。文化財の建物をリノベーションした個人商店もありました。開港や戊辰戦争^{ぼしん}について語れる人が多くて、同じ北海道でこんなに違うのか…。夏でも涼しい釧路で育った身には、函館の30度も新鮮な衝撃でした。

大学院修了後は富士通に就職しました。公共システムの画面設計、官公庁や高速道路の監視システム、展示会の映像からWebサイトまで、大学で学んだことをすべて活かせるやりがいのある仕事でしたね。

入社3年目の28歳のとき、高校時代の友人と市民団体「クスろ」を立ち上げました。釧路とまちを「クスろとさせたい」をかけ合わせた名前のとおり、ユーモアで地元を発信する団体でした。月1回の東京～釧路往

復を2年続けるうち、手触り感の違いを痛感したのです。自分がやったことの成果がダイレクトに見えることにやりがいを感じました。東京から地方に移りたくなったんですね。どのまちも魅力はあるのだろうけど、最初に浮かんだのが地元の釧路でした。一緒にやれる人も応援してくれる土壤もあったので30歳で釧路に戻ってきました。

まちを超えた仲間と、道東の輪郭を作ったそうですね

Uターンから2年、フリーランスとして動くなかで壁を感じていました。企画力が足りない。見積もりの相談をする人もいない…。一人でできることに限界を感じていたとき、北見や十勝で同じようにWebメディアを運営している若者たちの存在を知りました。会ってみたら課題観も目標も同じだったんですよ。2018年に「道東誘致大作戦」というイベントを共同開催すると、予想を超える反響でした。得意分野が全然違う人たちが集まったら、私が想像できなかった方向に大きくなり、このメンバーで2019年に一般社団法人ドット道東を設立しました。

現在のドット道東は、デザイン・ディレクション・写真撮影・ワークショップのファシリテーションまで一機通過（ワンストップ）で狙える組織です。また、インターシップのプログラム設計・学生の集客・リクルートサイトの制作まで、幅広く採用支援を行っています。

住んでいるからこそ、住民が何を求めているかの解像度が高いので、行政・民間企業・住民それぞれの課題に共感しながら、目的に沿った落としどころを提案できるようになりました。

今のドット道東について教えてください

設立から7年。創設メンバーが30代前半から40代に差し掛かるなか、焦点は「次の世代」へと移りつつあります。DOTO-NETというコミュニティは800人を超えそのなかで、東京に「東京道東同好会」という会社まで生まれました。道東出身者や道東に関わりたいた若者が自律的に集まり、東京でのイベント集客も担ってくれています。「こんなに道東に関わりたいた人がい

るんだな」と驚いています。

2025年に改定した新ビジョンの言葉は、「道東に、意志と価値が循環する土壤を作る」です。今秋には道東のアンオフィシャルガイドブック『.doto』の増補改訂版が刊行予定で動いています。2020年に発刊した際には初版は5,000部が1か月で完売、増刷を経て1万部を発行しました。前回同様50人以上で制作し、10月の「DOTO FUN」というイベントで先行発売の予定です。「住んでいる人に道東の良さを知ってもらおう本」というコンセプトは変わりません。よりディープな道東をお届けできそうです。

名塚さんにとっての釧路、道東は変わりましたか？

数年前は釧路を「結婚するには最適だけど、いまいち決め手に欠ける^{おきななしみ}幼馴染」と表現していました。「多分いい人だし、きっと幸せになれるけど、^{あか}垢抜けないし…だけど見捨てられない」という、愛憎入り交じった関係でしたね。

今はその感覚が少し変化し、パートナーのような存在です。そういうところもあるよねと認められるようになりました。ほかに素敵でいけてるまちがあっても、「私は釧路が好きだから」と割り切れるようになりました。

移住してきた人たちが「釧路っていいね」と言ってくれ、なかの人の自己肯定感が上がった実感があります。素直に「自分のまちはいい」と言える人を増やしていきたいです。

釧路、十勝、根室、オホーツク、道東全域に友人や仕事仲間が広がった今、地元がどんどん広がっている気がします。（2026年6月取材）

インタビュー後記

「笑えるくらい涼しい」というコピーが釧路市民の誇りになり、道東のガイドブック『.doto』は初版5,000部が1か月で完売した。かつて「釧路が嫌いだった」と言っていた名塚さんですが、次の目標は何ですかと問うと、次の世代に「挑戦と応援が循環する」土壤を作ることかなと応えてくれました。自分たちも地域の人に良くしてもらったからねと語る姿に、頼もしさとしなやかさを感じました。

かとう けいこ（株）まちづくり観光デザインセンター代表